

2/1 Sat.

第224回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演  
SATURDAY MATINÉE SERIES No.224 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

2/2 Sun.

第224回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演  
SUNDAY MATINÉE SERIES No.224 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

2/4 Tue.

非破壊検査 Presents 第25回 大阪定期演奏会  
フェスティバルホール 19時開演  
SUBSCRIPTION CONCERT IN OSAKA, No.25, presented by Non-Destructive Inspection Co., Ltd / Festival Hall 19:00

指揮  
Principal Guest Conductor  
ヴァイオリン  
Violin  
コンサートマスター  
Concertmaster

山田和樹 (首席客演指揮者) -p.6  
KAZUKI YAMADA

ネマニャ・ラドゥロヴィチ -p.8  
NEMANJA RADULOVIĆ

長原幸太  
KOTA NAGAHARA

マーラー  
MAHLER

花の章 [約8分] -p.10  
Blumine

ハチャトゥリアン  
KHACHATURIAN

ヴァイオリン協奏曲 二短調 [約35分] -p.11  
Violin Concerto in D minor  
I. Allegro con fermezza  
II. Andante sostenuto  
III. Allegro vivace

[休憩]  
[Intermission]

マーラー  
MAHLER

交響曲 第1番 二長調〈巨人〉 [約53分] -p.12  
Symphony No. 1 in D major "Titan"  
I. Langsam. Schleppend.- Immer sehr gemächlich  
II. Kräftig bewegt, doch nicht zu schnell  
III. Feierlich und gemessen, ohne zu schleppen  
IV. Stürmisch bewegt

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）(2/1、2)

特別協賛：非破壊検査株式会社 (2/4)

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）

文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会 (2/1、2)

協力：コジマ・コンサートマネジメント (2/4)

※2月4日公演では読売テレビによる収録が行われます。

### 芸劇ジュニア・アンサンブル・アカデミー プレコンサート

2月2日(日)の《第224回 日曜マチネーシリーズ》では、開演前の13時35分から、「芸劇&読響ジュニア・アンサンブル・アカデミー」の受講生によるプレコンサートをコンサートホールで開催します。

2/11 Tue.  
holiday

第117回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ  
横浜みなとみらいホール 14時開演  
YOKOHAMA MINATO MIRAI HOLIDAY POPULAR SERIES, No.117 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

2/13 Thu.

第629回 名曲シリーズ  
サントリーホール 19時開演  
POPULAR SERIES No.629 / Suntory Hall 19:00

指揮  
Principal Guest Conductor  
ピアノ  
Piano  
コンサートマスター  
Concertmaster

山田和樹 (首席客演指揮者) -p.6  
KAZUKI YAMADA

イーヴォ・ポゴレリッチ -p.8  
IVO POGORELICH

長原幸太  
KOTA NAGAHARA

グリーグ  
GRIEG

二つの悲しき旋律 作品34 [約9分] -p.14  
Two Elegiac Melodies, op. 34  
I. 傷ついた心  
II. 春

シューマン  
SCHUMANN

ピアノ協奏曲 イ短調 作品54 [約31分] -p.15  
Piano Concerto in A minor, op. 54  
I. Allegro affettuoso  
II. Intermezzo : Andantino grazioso  
III. Allegro vivace

[休憩]  
[Intermission]

ドヴォルザーク  
DVOŘÁK

交響曲 第7番 二短調 作品70 [約38分] -p.16  
Symphony No. 7 in D minor, op.70  
I. Allegro maestoso  
II. Poco adagio  
III. Scherzo : Vivace  
IV. Finale : Allegro

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）

文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：横浜みなとみらいホール (2/11)

2/14 Fri.

第25回 読響アンサンブル・シリーズ  
よみうり大手町ホール 19時30分開演 (18時50分から解説)  
YOMIKYO ENSEMBLE SERIES, No.25 / Yomiuri Otemachi Hall 19:30 (Pre-concert talk from 18:50)

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

《上岡敏之と読響メンバーの室内楽》

ピアノ  
Piano

ヴァイオリン

Violin

ヴィオラ  
Viola

チェロ  
Cello

ナビゲーター  
Navigator

ショーソン  
CHAUSSON

上岡 敏之

TOSHIYUKI KAMIOKA

伝田正秀 (読響コンサートマスター)、  
赤池瑞枝、杉本真弓、山田友子

MASAHIDE DENDA (YNSO Concertmaster),  
MIZUE AKAIKE, MAYUMI SUGIMOTO, YUKO YAMADA

長岡晶子、渡邊千春

AKIKO NAGAOKA, CHIHARU WATANABE

松葉春樹

HARUKI MATSUBA

鈴木美潮 (読売新聞東京本社 教育ネットワーク事務局専門委員)  
MISHIO SUZUKI

ピアノ、ヴァイオリンと弦楽四重奏のための  
協奏曲 二長調 作品21 [約40分]

Concerto for Violin, Piano and String Quartet in D Major, Op. 21

- I. Décidé – Calme – Animé
- II. Sicilienne
- III. Grave
- IV. Finale : Très animé

[休憩]

[Intermission]

フォーレ  
FAURÉ

ピアノ五重奏曲 第2番 八短調 作品115 [約33分]

Piano Quintet No. 2 in C minor, Op. 115

- I. Allegro moderato
- II. Allegro vivo
- III. Andante moderato
- IV. Allegro molto

※当初の発表から曲順が変更になりました。

2/28 Fri.

第595回 定期演奏会  
サントリーホール 19時開演  
SUBSCRIPTION CONCERT No.595 / Suntory Hall 19:00

指揮  
Principal Guest Conductor  
ヴァイオリン  
Violin  
コンサートマスター  
Concertmaster

ヘフティ  
HEFTI

ベルク  
BERG

[休憩]

[Intermission]

ブルックナー  
BRUCKNER

コルネリウス・マイスター (首席客演指揮者) -p.7  
CORNELIUS MEISTER

クリスティアン・テツラフ -p.9  
CHRISTIAN TETZLAFF

長原幸太  
KOTA NAGAHARA

変化 (日本初演) [約14分] -p.17  
Changeiments (Japan premiere)

ヴァイオリン協奏曲〈ある天使の思い出に〉  
[約26分] -p.18

Violin Concerto "To the memory of an angel"

- I. Andante – Allegretto
- II. Allegro – Adagio

交響曲 第2番 八短調 WAB 102  
(1877年稿/ノヴァーク版) [約60分] -p.20

Symphony No. 2 in C minor, WAB 102 (1877 version / Nowak edition)

- I. Moderato
- II. Andante : Feierlich, etwas bewegt
- III. Scherzo : Mäßig schnell
- IV. Finale : Mehr schnell

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)

文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：アフラック

文化庁委託事業「2019年度 戦略的芸術文化創造推進事業」

文化庁

主催：文化庁、読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

2/1  
土曜マチネー

2/2  
日曜マチネー

2/4  
大阪定期

2/11  
みなとみらい

2/13  
名曲

Maestro

指揮

**山田和樹**  
(首席客演指揮者)

KAZUKI YAMADA, Principal Guest Conductor

日本のエース“ヤマカズ”  
二人の鬼才と丁々発止



©読響

読響首席客演指揮者としての2年目を迎え、昨年6月の《定期演奏会》でも絶賛を博した日本のエースが登場。今回は二人の個性派ソリストと才能をぶつけ合い、名曲に新たな光を当てる。

東京芸術大学指揮科で小林研一郎、松尾葉子に師事。2009年ブザンソン国際指揮者コンクール優勝を機に、ヨーロッパでのキャリアをスタートさせた。これまでにベルリン放送響、サンクトペテルブルク・フィル、パリ管、フランクフルト放送響、フィルハーモニア管、ドレスデン・フィル、BBC響、チェコ・フィルなどへ客演している。また、小澤征爾の代役として12年のサイトウ・キネン・フェスティバル松本でオネゲルの劇的オラトリオ《火刑台上のジャンヌ・ダルク》を振り、17年には《魔笛》でベルリン・コーミッシェ・オーパーにデビュー。18年にはモンテカルロ歌劇場で《サムソンとデリラ》を指揮して好評を博すなど、オペラでも活躍。モンペリエ音楽祭、マントン音楽祭など国際的な音楽祭にも招かれている。

スイス・ロマンド管首席客演指揮者を経て、現在はモンテカルロ・フィルの芸術監督兼音楽監督、バーミンガム市響の首席客演指揮者、日本フィル正指揮者、東京混声合唱団音楽監督、自身が学生時代に創設した横浜シンフォニエッタの音楽監督などを務めている。渡邊暁雄音楽基金音楽賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞など受賞多数。PENTATONE、EXTONなどから管弦楽曲や合唱曲など、多数のCDをリリースしている。

指揮

**コルネリウス・マイスター**  
(首席客演指揮者)

CORNELIUS MEISTER, Principal Guest Conductor

ドイツの若き実力派が  
ブルックナーで飾る  
有終の美



©読響

オペラとコンサートの双方で活躍しているドイツ期待の若手指揮者。2017年4月から務めている読響首席客演指揮者のポストを今年3月に退任する。読響とは初めてとなるブルックナー作品で、有終の美を飾るだろう。

1980年ドイツ・ハノーファー生まれ。ハノーファー音楽大学でピアノと指揮を学び、21歳でハンブルク国立歌劇場にデビュー。2005年から12年までハイデルベルク市立劇場の音楽総監督を務めた。10年から18年まではウィーン放送響の首席指揮者兼芸術監督として、古典派から数々の現代作品までを指揮・録音。18年9月にカンブルランの後任として、シュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督に就任し、《ローエングリン》(新演出)で大きな成功を収めるなど高い評価を得ている。読響とは14年の初共演以来、スケールの大きな演奏を聴かせてきた。

これまでにロイヤル・コンセルトヘボウ管、バイエルン放送響、パリ管、北ドイツ放送響など世界の一流楽団に客演している。オペラにおいてもウィーン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、ミラノ・スカラ座、英国ロイヤル・オペラ、バイエルン国立歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、チューリヒ歌劇場などで活躍。19年1月にはメトロポリタン歌劇場に《ドン・ジョヴァンニ》でデビューし、今年2月にも《フィガロの結婚》を振る。19年12月にはバイエルン国立歌劇場でのアブラハムセン《雪の女王》を振り、話題を呼んだ。録音では、ハイドンなど古典派の作品から、ドビュッシー、ストラヴィンスキーをはじめとする近代の作品まで数多くリリースしている。

2/28  
定期

Maestro

2/1  
土曜マチネー

2/2  
日曜マチネー

2/4  
大阪定期

Artist



©Milan Djakov

ヴァイオリン

**ネマニャ・ラドゥロヴィチ**

NEMANJA RADULOVIĆ, Violin

熱い演奏で聴衆の心をつかむ“新時代の革命児”。類まれなるヴィルトゥオーゾで世界的な注目を浴びている。1985年、セルビア生まれ。ハノーファー国際コンクール優勝をはじめ、数々のコンクールで入賞。これまでにミュンヘン・フィル、ドレスデン国立歌劇場管、ベルリン・ドイツ響、フランス国立放送フィル、モンテリオール響などと共演。カーネギーホール、ベルリン・フィルハーモニー、アムステルダム・コンセルトヘボウをはじめとする世界の著名ホールでリサイタルを行っている。録音も数多く、2015年にはドイツの権威あるエコー・クラシック賞を受賞した。最新盤はグラモフォンからリリースしている、ハチャトゥリアンのヴァイオリン協奏曲を収録した『バイカ』。読響とは2017年6月以来、二度目の共演。

2/11  
みなとみらい

2/13  
名曲

Artist

奇抜な解釈と型破りな演奏スタイルで世界を震撼させている鬼才。読響とは、2016年12月にラフマニノフのピアノ協奏曲第2番で共演し、絶賛された。1958年旧ユーゴスラヴィアのベオグラード生まれ。12歳で単身モスクワへ渡り、モスクワ音楽院で学ぶ。80年のショパン国際ピアノコンクールに出場し、個性的な演奏で議論を巻き起こした。本選に進めなかったことに抗議したマルタ・アルゲリッチが審査員を辞任するなど一大スキャンダルとなり、世界的に注目を浴びた。81年にニューヨークのカーネギーホールでデビューし、以後世界各地で公演を重ねている。ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、ロンドン響、シカゴ響など一流楽団と共演。録音も数多いが、19年に21年振りの新譜をソニー・クラシカルからリリース。現在はクロアチア国籍で旧ユーゴ内戦後の慈善事業にも力を入れている。



©Malcolm Crowthers

ピアノ

**イーヴォ・ポゴレリッチ**

IVO POGORELICH, Piano



©Giorgia Bertazzi

ヴァイオリン

**クリスティアン・テツラフ**

CHRISTIAN TETZLAFF, Violin

現代最高峰のドイツの名匠が読響に初登場。1966年ハンブルク生まれ。ミュンヘン国際コンクールで第2位を獲得して以来、ソリストとして、ウィーン・フィル、ベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ロンドン響、ボストン響など世界の主要楽団と共演。今年も3月にサロネン指揮フィルハーモニア管とベルクの協奏曲を弾くほか、ソヒエフ指揮ベルリン・フィル、ノセダ指揮ロンドン響、エツェンバッハ指揮ワシントン・ナショナル響と共演する。通常レパートリーはもちろん、同時代作品の演奏にも力を入れている。テツラフ・カルテットをはじめとした室内楽でも先鋭的な活動を続け、録音も多数。ドイツのヴァイオリン製作者ペーター・グライナーが手がける楽器を使用。クロンベルク・アカデミーで定期的に教鞭をとっている。

2/28  
定期

Artist

2/1

土曜マチネー

2/2

日曜マチネー

2/4

大阪定期

Program Notes

## マーラー 〈花の章〉

グスタフ・マーラー（1860～1911）は、ボヘミアの小村に生まれ、ウィーンで学んだ19世紀から20世紀にまたがる作曲家。世代的にみると、〈ニーベルングの指環〉で有名なワーグナーの遅く生まれた息子、無調音楽の創始者シェーンベルクの歳の離れた兄、といったところか。交響曲をある種強力に「文学化」し、このジャンルの可能性を拡大・拡張した。指揮者としても、オペラ作品を当時の慣習に反してノーカットで上演するなど、画期的な仕事をした人である。

さて、この〈花の章〉は、もともとは本日のメイン演目である彼の交響曲第1番に組み込まれていたもので、現在の第1楽章と第2楽章の間に置かれていた。つまり、作曲家28歳のときにひとまず書かれたこの記念すべき最初の交響曲は、当初5楽章から成っていたのだ。

のちに削除された経緯とタイトルの由来については、交響曲第1番の項で述べるが、本作の起源は、実は交響曲よりもさらに前にさかのぼる。1884年、24歳のとき、マーラーは当時勤めていたドイツはカッセルの劇場用に、ある付随音楽を書いた。『ゼッキンゲンのラッパ吹き』という芝居がそれで、これに曲を付けたのだ。こうした仕事は、当時の劇場指揮者にとってはいわば茶飯事。その中の1曲を書き直したものがこの〈花の章〉で、出版は作曲家が世を去って56年後にようやく実現をみた。トランペットのたおやかなソロが印象的な、静かで、透明な牧歌である。

〈船木篤也 音楽評論〉

作曲：1884年、1888年(?) / 初演：1889年11月20日、ブダペスト（交響曲第1番として） / 演奏時間：約8分  
楽器編成 / フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット、ティンパニ、ハープ、弦五部

## ハチャトゥリアン ヴァイオリン協奏曲 二短調

アラム・ハチャトゥリアン（1903～78）は、帝政ロシア時代のジョージア（旧グルジア）はティフリス（現トビリシ）の、アルメニア人家庭に生まれた。同じロシア帝国のサンクトペテルブルクに生まれたショスタコーヴィチと同世代。のちのソビエト社会主義共和国連邦を生きぬき、また西欧モダニズムに毒された「形式主義」に陥っていると当局から批判されることになる（1948年のいわゆる「ジダーノフ批判」）ので、その点でも両者は似ているようにみえる。しかし、ハチャトゥリアンのほうが、その資質からみて、当時の政治体制が求める「社会主義リアリズム」により近い人だったと言えるだろう。すなわち、その音楽は伝統的で、分かりやすいメロディ、分かりやすい形式、悲劇的・悲観的ではない前向きな表現を有している。アルメニアの民族音楽的要素を19世紀からのロシア交響楽の伝統に融かしこんだ人、とはよく言われるところである。

ただ、創作の動機が常に政治的であるとは限らない。1940年作のヴァイオリン協奏曲は、息子の誕生を待ちわびる喜びの中で書かれたという。「そうした感情、生に対する愛おしさが音楽となったものなのです」と作曲家は回想している。ヴァイオリンの巨匠、ダヴィッド・オイストラフによって行われた初演は大成功で、翌1941年、ハチャトゥリアンは第1回「スターリン賞」を獲得している。

**第1楽章**は、エネルギーで踊るような第1主題が中心。これと対照的にたおやかな第2主題は、終楽章でも回帰する。大規模なカデンツァ（管弦楽がやみ、独奏楽器が妙技を披露する）が再現部の前にある。

**第2楽章**は、夜想曲の雰囲気。幽玄な主題がワルツ風に変奏されてゆく。

**第3楽章**は、四つの主題が交代し、突進するロンド形式。シンクペーションの多用など、リズムの変化が面白い。

〈船木篤也 音楽評論〉

作曲：1940年 / 初演：1940年11月16日、モスクワ / 演奏時間：約35分  
楽器編成 / フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、サスペンデッド・シンバル、タンブリン）、ハープ、弦五部、独奏ヴァイオリン

2/1

土曜マチネー

2/2

日曜マチネー

2/4

大阪定期

Program Notes

2/1  
土曜マチネー2/2  
日曜マチネー2/4  
大阪定期

Program Notes

## マーラー 交響曲 第1番 二長調〈巨人〉

初演は1889年、ブダペストにて。〈花の章〉の項で述べたように、このときはまだ5楽章から成っていた。その後、1893年にハンブルクで、94年にワイマールで上演するにあたり、マーラーは全体を前半3楽章・後半2楽章の2部に分け、これを交響曲ではなく「交響詩」とした。ハンブルク上演に際してはさらに、彼が愛読した小説家、ジャン・パウルの著作名から採った「巨人」をタイトルとし、各楽章にもジャン・パウ風風の標題をつけた。この時点での第2楽章に付せられた〈花の章〉なる名称も、また今日なおよく用いられる〈巨人〉というタイトルも、このときのマーラーの判断に由来する。

ところがマーラーは、4度目の上演（1896年ベルリン）以降、これらの標題を全部はずしてしまう。〈花の章〉にいたっては楽章そのものが削除され、作品はふたたび「交響曲」と銘打たれることに。交響曲は、古典派のハイドン、ベートーヴェン以降、4楽章制をとるのが基本だ。見た目にもそれと分かる形へと、決定的な模様替えが行われたわけである。1899年の初出版にあたっては、それこそ古典派の交響曲よろしく、第1楽章と第2楽章にリピート記号が加えられた。もちろん、細部の書き換えも、この間、数多くなされている。

こまごまと成立経緯を示したのは、マーラーがいかにか「交響曲」という伝統形式を意識しながら、同時にそれを拡張しようとしたか、その葛藤の軌跡を示すためである。拡張は「文学化」と言い換えることもできよう。その意味するところは、小説の作品名にあやかるといった点に留まらず、実に多岐にわたるのだが、具体的な表れの一つとして、第3楽章を挙げよう。

冒頭のコントラバスが弾く葬送行進曲のようなメロディ。これは日本でも「しずかな鐘の音」や「ゲーチョキパーで」といった詞で知られる、あの有名な旋律（元はヨーロッパに古くから伝わる戯れ歌）のパロディではないか？ 長調だったのが、陰鬱な短調に変えられている。マーラーはふざけているのだろうか。

答えはこの少し先にある。ズンチャ・ズンチャといったリズムに乗って、クラリネットとファゴットが素っ頓狂なメロディを吹くシーン。まるで、どこかの村祭りにも出くわしたかのような気分になるところだが、マーラーはここに、なんと「パロデ

イで」演奏せよと指示を書きつけているのだ。

そう、パロディのように聞こえたものは、実際、それと意図されたものだった。言ってみれば、浮世を一步引いてみる態度をとる。もっと言えば、生と死を背中合わせにみる文学的な態度。決して大げさに言っているのではない。冒頭の葬送の気分も、その元ネタが世俗の戯れ歌となれば、そう考えてよいのではないか。そしてその葬列の前を、村祭りの一団が愉快地過ぎてゆく……。

**第1楽章**は、ごく微かならの音が、弦楽器によって7オクターヴにもわたって重ねられ開始する。それがひたすら長く引き延ばされ、最初は何拍子なのかもわからない。そんな「大気」の中から、やがてカッコウの声が聞こえ、春が萌えいずる。

**第2楽章**は元気いっぱいのワルツ（のパロディ）。中間部も、やはり踊りのリズムに支配されるが、こちらはずっと穏やかで、気だるい感じ。その後、ワルツの部が短く再現される。

**第3楽章**は、先述の葬送を両端に配し、中間に弱音器つきの弦が歌う夢幻的なシーンを置く。自作の歌曲集〈さすらう若人の歌〉第4曲の引用である。その歌詞は「菩提樹のもとで……ぼくは忘れた、生きることの苦しみを」というもの。

**第4楽章**は、第3楽章の葬送を断ち切るようにして、突如、爆発的に開始する。悲しみと喜び。平安と闘争。第1楽章冒頭の回想。さまざまな感情、さまざまな情景が交錯し、最後に到達するのは、ホルン奏者が起立して鳴らすファンファーレも輝かしい圧倒的凱歌だ。

〈松本篤也 音楽評論〉

作曲：1884年、1888年／初演：1889年11月20日、ブダペスト（初稿による）／演奏時間：約53分  
楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（バスクラリネット、エスクラリネット持替）、エスクラリネット、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン7、トランペット5、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、銅鑼）、ハープ、弦五部

2/1  
土曜マチネー2/2  
日曜マチネー2/4  
大阪定期

Program Notes

## グリーグ

## 二つの悲しき旋律 作品34

ノルウェーの国民的作曲家エドヴァルド・グリーグ (1843~1907) は、ピアノ協奏曲 (1868) や劇音楽〈ペール・ギント〉(1875) を作曲後の1880年、ノルウェーの農民詩人ヴィニエの詩に基づく歌曲集〈ヴィニエの詩への12の旋律〉を完成させた。〈二つの悲しき旋律〉は、その中の第3曲と第2曲を弦楽合奏用に編曲したもの。グリーグは同年、ベルゲンの音楽協会「ハルモニエン」のオーケストラの指揮者に就任したため、そこでの演奏用に編曲され、初演もなされたとみられているが、正確な事情はわかっていない。なお本作は、ヨーロッパ中で行われたグリーグの演奏会で大成功を収めたという。

2曲共に哀しみを帯びた清澄な音楽。それが第2ヴァイオリンとヴィオラをそれぞれ2分割した全7声部を基本とする精緻な弦楽によって歌い上げられる。

**第1曲 傷ついた心** 原曲では「生活に疲れ、傷ついた詩人の心は、春が訪れるたびによく蘇る」といった内容が歌われる、<sup>せきりょう</sup>寂寥感と<sup>たた</sup>悲哀を<sup>じょうせい</sup>湛えた音楽。主題が、最初と最後に第1ヴァイオリン、間にチェロで繰り返されるシンプルな構成ながらも、バックのハーモニーやリズムが深い詩情を醸成する。

**第2曲 春** 原曲は、孤独と貧困の中にあつたヴィニエが「これが自分にとって最後の春であろう」(実際、この詩が書かれた1870年に死去)と、美しい春の到来を感慨深くみしめる歌。グリーグの歌曲の代表作であり、本編曲を含めて単独で演奏される機会も多い。なお、しばしば表記される「過ぎた春」の題は、詩の意味的に誤訳といえる。

この曲も、諦めと憧れ、切なさ<sup>せきりょう</sup>と安らぎが同居した美しい主題が2回奏されるシンプルな構成だが、楽器の組み合わせの妙で豊かな感情が生み出される。特に2回目、第1ヴァイオリンとチェロも分割されて全体が9声部となり、高音域から順に楽器を増やすことで、感動的な広がりがもたらされる。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1880年／初演：不詳／演奏時間：約9分  
楽器編成／弦五部

## シューマン

## ピアノ協奏曲 イ短調 作品54

ドイツ初期ロマン派の代表格ロベルト・シューマン (1810~56) が残した唯一のピアノ協奏曲。シューマンは1827年から39年にかけて四つのピアノ協奏曲に着手し、いずれも未完成に終わっていた。しかし、1840年にピアニストのクララ・ヴィークと結婚した彼は、翌1841年、交響曲第1番の完成に自信を得て、クララのために〈ピアノと管弦楽のための幻想曲〉を作曲した。同曲は1843年に改訂され、さらに1845年、3楽章の協奏曲へと発展することになった。そして、第3楽章、第2楽章の順に作曲がなされ、先の〈幻想曲〉を改訂した第1楽章を加えて全体を完成。内輪で試演後の1846年1月にクララの独奏で公開初演され、その成功はシューマンの名声を大いに高めることとなった。

本作は、こうした経緯と、「ヴィルトゥオーゾのための協奏曲は書けない」と語ったシューマンの生き方が相まって、内省的な「協奏的幻想曲」風のテイストを有している。とはいえ技巧的にも容易でなく、名技性と叙情性とダイナミズムが一体となった、ロマンティックかつ独創的な作品となっている。

**第1楽章** アレグロ・アフエツトウオーソ ソナタ形式だが、オリジナルが幻想曲だけに即興的な趣が強い音楽。鮮烈な出だしに続いて木管で奏される柔らかな旋律を実質的な唯一の主題としながら、多様な変化を遂げていく。ちなみに、主題のC-H-A-A (ドーシーラーラ)の動きは、シューマンの理想を具現する架空の団体「ダヴィット同盟」でのクララの呼び名「キアリーナ (Chiarina)」の読み替えだという。

**第2楽章** アンダンティーノ・グラツィオーソ 「間奏曲」と付された、感傷的で穏やかなへ長調の緩徐楽章。移行部を経て、休みなく終楽章へ。

**第3楽章** アレグロ・ヴィヴァーチェ 第1楽章の主題と関連した堂々たる第1主題に、3拍子だが2拍子にも聞こえる第2主題をまじえて、華やかな楽想が展開される。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1845年／初演：1846年1月1日、ライプツィヒ、ゲヴァントハウス／演奏時間：約31分  
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

## ドヴォルザーク

## 交響曲 第7番 二短調 作品70

チェコの国民主義音楽の巨匠アントニン・ドヴォルザーク(1841~1904)は、1878年作の〈スラヴ舞曲〉第1集で名を上げ、1881年初演の交響曲第6番で、国際的な名声を高めていった。そうした上昇期の1884年3月、ロンドンのフィルハーモニー協会の招きで、初めてイギリスを訪問。自作を指揮し、圧倒的な支持を受けた。その結果、彼はフィルハーモニー協会の名誉会員に選ばれ、協会から新たな交響曲を依頼された。そこで生まれたのがこの第7番である。ちなみに、彼は生涯に9回もイギリスを訪れることになる。

本作は、1884年12月13日に着手され、翌85年3月17日に完成。同年4月ロンドンで自身の指揮により初演され、大成功を収めた。さらにビューロー、リヒター、ニキシュ等の大指揮者が相次いで取り上げ、急速に普及していった。

折しもドヴォルザークは、イギリス訪問直前の1883年12月、ウィーンでブラームスの交響曲第3番の初演を聴いて多大な刺激を受けていた。これと相まって本作は、第6番までの交響曲とは違った緊密な構成と強い表現力をもつ、劇的な作品となっている。彼の音楽に通底するボヘミア情趣も、普遍的な交響曲様式の中に絶妙なバランスで融合し、絶対音楽としての完成度の高さにおいては、民俗色が濃い第8番や第9番を凌ぐ作品とも称されている。

**第1楽章** アレグロ・マエストーソ 暗く不安げな第1主題と牧歌的な第2主題を軸に運ばれる、悲劇性を帯びた音楽。

**第2楽章** ポコ・アダージョ クラリネットが出す平穏な主題に、ホルンが出す優しい主題等が交わる、へ長調の緩徐楽章。

**第3楽章** スケルツォ、ヴィヴァーチェ ボヘミアの舞曲フリアント風の主部に、若干テンポを落とした明るめの中間部が挟まれる。

**第4楽章** アレグロ 冒頭の悲劇的な主題を軸に展開される力強いフィナーレ。民謡風の流麗な主題が気分を変える。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1884~85年／初演：1885年4月22日、ロンドン／演奏時間：約38分  
楽器編成／フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

## ヘフティ

## 変化(日本初演)

ダーフィット・フィリップ・ヘフティ(1975~)は、現代スイスを代表する作曲家。チューリヒとカールスルーエでヴォルフガング・リーム、クリストバル・アルフテル、ルドルフ・ケルターボーンらに作曲を、クラリネットをヴォルフガング・マイヤーに師事し、さらに指揮者としても活躍している。多作家で、管弦楽曲も多く手がけるが、その作品は緻密に設計され、特殊奏法を多用して独自の音響世界を切り拓く。2013年にエルンスト・フォン・ジームス賞、2015年にヒンデミット賞など権威ある作曲賞を受賞している。

〈変化〉は、2011年にハイデルベルク市立劇場管弦楽団からの委嘱で書かれ、2012年4月25日に「ハイデルベルクの春」国際音楽祭においてフランチェスコ・アンジェリコの指揮で初演、当時、同劇場の音楽総監督を務めていた指揮者コルネリウス・マイスターに献呈された。単一楽章で、多種多様な打楽器と管弦楽器の特殊奏法を駆使される。作り込まれた音響は、静的な部分からエネルギーの爆発までゆるやかに変容し、細かい動機の組み立てや、衝動的な鋭い切り込みなど、鮮やかな対比を作り上げる。

冒頭(レント)は、コントラファゴット、チューバ、ハーブ、コントラバスが地を這うように低音でうごめく。やがて楽器が次々と加わり響きに色合いが生まれ、打楽器がリズムを刻む。「2倍の速さで」と指示されたところから、断片的な動機が様々な楽器に現れ、積み重なる。テンポが速くなり、アクセントで強調された弦楽器の反復音型の響きの上に管楽器の音色や打楽器のリズムが浮かび、やがて反復音型は木管楽器に移される。静かな音響の持続(モデラート)を経て、テンポを変化させながら響きがうねり、最後(レント)は、ヴィオラによる歌が浮かび上がり、揺れ動く響きの中で静かに結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：2011年／初演：2012年4月25日、ハイデルベルク／演奏時間：約14分  
楽器編成／フルート、ピッコロ、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット、バスクラリネット、ファゴット、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、シンバル、スプリングドラム、クロタル、トライアングル、リン、カスタネット、ムチ、マラカス、レインスティック、マリмба、ヴィブラフォン、ゴング、銅鑼、バンブーウインドチャイム、シェルウインドチャイム、木魚、ロッズ、アंकクルン)、ハーブ、弦五部



## ベルク

## ヴァイオリン協奏曲〈ある天使の思い出に〉

新ウィーン楽派のアルバン・ベルク（1885～1935）は、1935年夏に「ある天使の思い出に」と献辞を付したヴァイオリン協奏曲を完成させた。「ある天使」とは、マーラーの未亡人アルマと、彼女が再婚した建築家ヴァルター・グロピウスとの間の娘マノン・グロピウスのこと。彼女は1935年4月22日に、病気のため19歳の若さで世を去った。ベルクはマノンの訃報を受けて、1928年以来専念していた歌劇〈ルル〉の作曲を一時中断し、この協奏曲（アメリカのヴァイオリニスト、ルイス・クラスナーの依頼を受けて、2月から着手していた）に取りかかり、作曲者にとっては異例のスピードで同年8月に書き上げた。

全体は、それぞれ二つの部分から成る2楽章で構成され、シェーンベルク門下のベルクは、師が創案した12音技法を用いて作曲した。この作品の基本音列は長3和音と短3和音を含む音列のため、楽曲全体が無調と後期ロマン派の調性感の間を浮遊するような独特の響きに特徴がある。さらにベルクが示唆したプログラムによれば、第1楽章は天使のように美しいマノンの思い出、第2楽章はマノンの苦しみと死、そして天国への昇天が描かれる。マノンのレクイエムとして書かれた作品であるが、すでに楽曲の全体構想や音列は、訃報以前から出来上がっていて、それだけではない含みもこの作品にはある。ベルクの初恋の相手の出身地であるケルンテン地方の民謡が現れたり、第2楽章後半でベルクの晩年の恋人ハンナ・フックス＝ロベティンを音楽構造のなかで暗示する仕掛けを用いたり、さらにはバッハのカンタータも引用される。

作曲中のベルクは、背中に出来た腫瘍に悩まされ、体調が思わしくなかった。そうしたなかで死を意識することもあり、自らの人生もこの作品に重ねたのかもしれない。同年12月24日にベルクは敗血症で亡くなり、この協奏曲は自身へのレクイエムにもなった（そのため〈ルル〉のオーケストレーションは第3幕の途中で終わった）。この作品に込められた意味をめぐっては、のちの研究者によって様々な解釈されてきたが、真意は解明されず謎のまま残されている。そのことがまた、この作品をいっそう魅力的なものにしていると言えるだろう。

初演は、1936年4月19日に、委嘱者のクラスナーがヴァイオリン独奏を務め、

当初はウェーベルンが指揮する予定だったが、最終リハーサルの後、キャンセルしたため、ヘルマン・シェルヘンが代わりに指揮をした。

**第1楽章** アンダンテ、4/4拍子～アレグレット、6/8拍子 独奏ヴァイオリン、クラリネット、ハーブが、基本音列にもとづく動機を最弱音でゆるやかに反復する導入で始まる。なかでも、独奏ヴァイオリンの開放弦によるソレラミという5度音程の動機が印象的だ。主部は、独奏ヴァイオリンで基本音列が示され、新しい楽想を含みながら静かに進められる。冒頭の導入の反復動機を経て、快活な後半は、基本音列から作られたスケルツォ風の楽想やウィーン風のゆったりした楽想などが様々な表情をみせる。最後に、独奏ヴァイオリンの背後でケルンテン地方の民謡が静かにホルンからトランペットへと受け継がれる。

**第2楽章** アレグロ、3/4拍子～アダージョ、4/4拍子 激しい不協和音で始まり、独奏ヴァイオリンがカデンツァ風に自由に展開し、付点のリズムが特徴的な動機を執拗に反復する。独奏ヴァイオリンが技巧を繰り広げる静かな中間部を経て、息詰まる緊迫感が戻ってくる。そしてゆるやかな後半は、バッハのカンタータ第60番〈おお永遠よ、恐ろしき言葉〉の終曲のコラール“われは満ち足れり”の引用で始まる。コラールは、独奏ヴァイオリン、続いてバッハの和声づけのままクラリネットとバスクラリネットに現れる。この提示の後、穏やかな二つの変奏となり、再びケルンテン地方の民謡が「遠くから響いてくるように」回想される。最後は、コラールの響きを背景に独奏ヴァイオリンが静かに歌う。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1935年／初演：1936年4月19日、バルセロナ／演奏時間：約26分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、アルトサクソフォン、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、銅鑼、ゴング）、ハーブ、弦五部、独奏ヴァイオリン

## ブルックナー

## 交響曲 第2番 八短調 WAB 102 (1877年稿/ノヴァーク版)

アントン・ブルックナー(1824~96)の交響曲は、どの作品も例外なく、完成してから何らかの手が入れられている。そのなかには作曲家自身による改訂や弟子たちの勝手な改竄など、大幅な変更が加えられたものも少なくない。交響曲第2番も完成後、数回にわたって改訂されてきた。1872年に書き上げた後、翌年10月26日にブルックナー自身の指揮で初演されるが、すでにこの初演までに多くの変更がなされた。1876年に2回目の演奏が行われたときにも手を入れ、さらに1876年から77年にかけて大幅な改訂が施された。今日は、この1877年稿にもとづき、1965年に出版された新全集(ノヴァーク版)による演奏である。

交響曲第1番が初演された1868年の7月、ウィーン音楽院からブルックナーのもとに和声法、対位法、オルガン演奏の教授として採用するという通知が届いた。住み慣れたリンツを離れ、ウィーンで新しい生活が始まった。ブルックナーの講義は厳格だったが、ユーモアもあり、学生の評判も悪くなかった。創作活動も意欲的で、翌年9月に二短調の交響曲を書き上げ、楽譜に第2番と記したものの、ウィーンで活躍していた指揮者オットー・テソフの苦言に自信を失った(ブルックナーはこの作品を番外としたが、破棄することができず、晩年、「第0番」としてリンツの博物館に遺した)。変口長調の交響曲にも取りかかるが、これはスケッチから進展することはなかった。第2番となる八短調の交響曲は、1871年秋に作曲が開始され、ほぼ1年後の9月11日に完成した。10月にはウィーン・フィルによる試演が行われたものの、またもやテソフに「長すぎる」と指摘され、演奏は見送られた。ようやく翌年、友人たちの尽力で初演にこぎつけ、両端楽章の長さは依然問題だったが、聴衆からは好意的に受け入れられた。

ブルックナーは初演後、この交響曲をウィーン・フィルに献呈しようとしたが断られた。1873年にバイロイトのワーグナーを訪問した際に第2番と第3番の楽譜を持参したが、ワーグナーが献呈を望んだのは作曲中の第3番の方だった。10年後、今度はリストに献呈するも、彼の対応に失望し、すぐに撤回した。第2番は献呈では巡り合わせに恵まれなかったが、ブルックナー独自の作曲手法が確立していく出発点となった交響曲として興味深い作品である。

**第1楽章** モデラート、八短調、4/4拍子 ソナタ形式。ヴァイオリンとヴィオラのトレモロを背景にチェロがのびやかな第1主題を提示する。霧の中から浮かび上がるような、いわゆる「ブルックナー開始」はこの交響曲で初めて用いられた。全ての楽器が休止する「総休止」も頻繁に現れる。それゆえに「休止交響曲」とも言われるが、ここでの休止は形式の区分を明確にする役割ももつ。総休止に続いて第2主題(変口長調)、第3主題と続き、オーボエから始まる木管楽器の旋回音型を含む楽句の受け渡しで提示部を閉じる。展開部は力強く高まり、再現部を経て、総休止をはさみながら進み、激しいコーダに到達する。

**第2楽章** アンダンテ：厳かに、いくぶん動きをもって、変口長調、4/4拍子 弦楽器が静かに清らかな主題を提示する。この主題が副次主題をはさみ3回繰り返される。コーダで自作のヘ短調のミサ曲からの引用があり、最後はフルートとヴァイオリンのソロが寄り添い、クラリネットの響きで祈るように結ばれる。

**第3楽章** スケルツォ：ほどよい速さで、八短調、3/4拍子 主部は民俗舞曲風の躍動的な主題が力強くたたみかける。トリオ(同じテンポで、八長調)は、第1楽章冒頭と同様にヴァイオリンのトレモロからヴィオラの牧歌的な主題が浮かび上がる。主部の再現の後、ティンパニのリズムに導かれてコーダとなる。

**第4楽章** フィナーレ：より速く、八短調、2/2拍子 ソナタ形式。弱音から次第に高まる導入に続いて、3連符を含む戦闘的な第1主題が現れる。同様の導入からイ長調の第2主題がヴァイオリンに始まり静かに広がる。激しい第3主題を経て、突然総休止となり、自作のヘ短調ミサから「キリエ」が引用される。展開部、再現部と進み、八長調の輝かしいコーダで全曲を締めくくる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1871~72年/初演：1873年10月26日、ウィーン/演奏時間：約60分  
楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部